

ステレオタイプに疑義を呈する

「そうでなくてもよい」視点

川口幸大. 2017. 『ようこそ文化人類学へ: 異文化をフィールドワークする君たちに』
京都: 昭和堂.

愛知県立大学大学院国際文化研究科日本文化専攻博士前期課程
池本侑平

本書は、文化人類学を志し始めた初心者に向けて書かれた入門書である。著者である川口は、2010年から現在まで東北大学大学院文学研究科の准教授であり、中国・広東省の村落部を中心に、家族や宗教といった主題でフィールドワークを用いた研究をしている。文化人類学がどのような学問なのか、何を研究するのか、という基本的な話について多岐にわたるテーマ設定のもと解説し、何に役立つのかという実践的な面についても説明を試みている。

本書は、全10章から構成される。第1章「文化とは、文化人類学とは」では、文化人類学について、また文化について、いくつかの例を挙げて説明している。東北地方で毎年行われる芋煮が、関東以西の地方の人々にとってはなじみのない「異文化」であることなど、比較的身近な例が挙げられている。

第2章「家族——あなたの大切な人は誰ですか」では、一族全員から村という集団が構成されるスーダンのヌアー族、養子を頻繁にとるアラスカの 에스 키モーなどを例に挙げるほか、近年発達してきた代理出産や体外受精といった生殖医療の話も挙げ、血縁や規模といった視点から家族の形について論じている。

第3章「結婚——なぜするのか、しないのか」では、なぜ結婚するのか、結婚して何が変わるのか、実際に結婚して式を挙げるまでの過程を追いながら論じている。また日本とは異なる結婚制度・結婚観を持つ人々、あるいはその制度の例として、第2章にもあったヌアー族の死霊婚——未婚のまま亡くなった男性に対して行う結婚——などを挙げている。

第4章「性——バリエーションは無限大」では、海外の性観念に関するものとしてマーガレット・ミードやシモーヌ・ド・ボーヴォワールの調査・著作を挙げ、それに対し日本の性に関する観念がどのようであったかを論じている。また、公に認められた「第三の性」として、インドのヒジュラを例に挙げ、日本における法律上は「男か女」の二者択一しかない現状と対比を行っている。

第5章「宗教——あなたの信じるものは何ですか」では、世界でも有数の無神論的な国とされる日本において、合格祈願や初詣など、宗教的な物事が多く存在することの疑問に向き合っている。宗教の広範な捉え方の例としてはアザンデ人の妖術や魔女狩り、また本来は宗教の対に位置するとされる科学も取り上げ、宗教の今後のあり方についても論じている。

第6章「儀礼——どのように境界が設けられるのか」では、いつからが大人か、どうなれば死とされるか、などの「境界」について論じている。また、その境界をまたぐための通過儀礼について、西アフリカのフルベと呼ばれる人たちや、東北・北陸の一部高校を例に挙げ、「分離—過渡—統合」という3段階で構成されるシステムを紹介している。

第7章「贈与と交換——貰ったのと同じだけ施しなさい、そうすれば万事うまくいく」では、「貰う—返す」という互酬性の関係に「なぜ返すのか」という疑問を投げかけ、ビジネスや資本主義にまで話を広げていく。互酬性の有無がもたらす違いを「町の電気屋さん」と「大型量販店」の差異を例に挙げて解説し、資本主義の問題点やその解決法も探っている。

第8章「観光——『観光客向け』は嫌ですか」では、「観光客向け」とされるものはその観光地に元から存在している「本物」ではないという、我々が半ば無意識に行う判断に着目し、観光とは何なのか、「本物」と「偽物」の区別はどこなのか、また観光に関連して、伝統とは本当にその地に昔から伝わっているものなのか、著者の考えを述べている。

第9章「フィールドワーク——文化人類学の方法論」では、文化人類学でのフィールドワークがどのようなものであるかを解説している。現在のフィールドワークの原型を確立したマリノフスキを紹介した後、著者自身が博士課程時代に行った中国・広東省でのフィールドワークの経験を語る。後半では、調査がもつ「暴力性」——調査する側が強いという意識——について著者の意見を述べている。

第10章「文化人類学を学んで——いったい何の役に立つ？」では、文化人類学を志す人が持つ問題関心の変化や、その後の進路などについて、著者の学生時代や、准教授の職に就いて教えてきた学生の話を引き合いに出して述べている。最後に文化人類学がもつ難点と重要性を述べ、本書を閉じている。

本書における論点は、2点ある。1点目は「そうあらねばならない」と「そうでなくてもよい」の相対化、2点目は日本と海外の対比である。

まず1点目に関して、本書の章構成は、文化人類学の紹介部に当たる第1章、テーマごとに文化人類学の視点を解説した第2章から第9章、総括に位置づけられる第10章と、大きく3部に分けられる。その全3部において、共通して見られる表現が「そうあらねばならない」と「そうでなくてもよい」である。ひとつ例を挙げるならば、日本では男性か女性のどちらかでなければならない——「そうあらねばならない」——が、インドではヒジユラという「そうでなくてもよい」選択肢が設けられている。人々が「そうあらねばならない」と考えているのは、実際は利便性という理由のもと交わされた取り決めに過ぎない。「ずっと『そうあった』から、これからも『そうあらねばならない』かのように物事が進められて」(p.175)いるだけなのである。著者はこの考え方に対し、文化人類学的視点として「今ある何かがそうあるのではなく、そうなる(なった)という捉え方」(p.175、傍点は引用元)を提唱している。こう考えることで、「『そうあらねばならない』ことには、歴史、環境、経済などのいくつもの理由がある」(p.12)ことがわかる。これは非常に説得力のある言葉と言えるだろう。「なぜそうであるのか」を尋ねられたとき、「ずっとそうだから」と答えるよりも、「そうなった」理由を説明できた方がみな納得するはずである。当然とされていることに疑問を投げかけるといふ、文化人類学の特徴をこれほど分かりやすく説明した言葉はないと評者は考える。

続いて2点目に関して、研究の方法論を述べた第9章と総括にあたる第10章を除く全ての章において必ず日本と海外の双方の例が出されている。「そうあらねばならない」というステレオタイプを考えを崩す、「歴史、環境、経済などのいくつもの理由」の違いが浮き彫りにされることで、文化人類学の意義を示せていると言えるだろう。グローバル化が進む現代において、この文化人類学がもつ意義——異文化を知る意義——は、間違いなく大きい。グローバル化

が進むということは、自文化と異文化の境界がまたがれやすくなるということである。当然、異文化に触れる機会は増加する。異文化との交流は、思わぬところで衝突を生むこともある。第 1 章には中国と日本の食生活の違いも紹介されている。日本人からすれば中国で食用とされる「水ゴキブリ」——ゲンゴロウのことである——は信じられないが、同様に中国の人々からすると「卵かけご飯」が信じられない、という話である。この他にも、互いに認めがたいものは数多い。その違いの理由を考え、受け入れることは今後必要になってくると考えられる。

日本でも、徐々にではあるが既存のステレオタイプが崩されつつある。同性婚を認める法案が提出されたのは記憶に新しい。こういった時代の変化に即しつつ、「そうでなくてもよい」可能性を様々な主題で説いたことが本書の貢献であると言える。

本書は全ての章において、読者への質問や『そして父になる』といった有名な映画の話などから書き出され、読み進めやすい構成となっている。提示される例も身近なものが必ず組み込まれており、自身の経験から共感を抱くことのできる読者も多いだろう。文化人類学の入門書として最適であり、加えて、「歴史、環境、経済などのいくつかの理由」という表現があるように、その考え方は文化人類学の専攻でなくとも、参考になる点が多い。文化人類学を志す人に限らず、幅広い分野の人が一読すべき書籍である。